

近作について

藤 井 光

(現代美術家)

藤井／大友さんとの対談を受けて、また水出さん、飯田さんの2つの発表に続いて有機的につながる話ができればいいなと考えています。まずは、震災が起きたという「点」のインパクトが非常に強く、その後「線」で見るという話は、僕自身が考えてきたこととつながるのではないかと考えています。対談でも少し触れましたが、「ASAHIZA」という映画に絡めて少しお話ししたいと思います。

内容を簡単に説明しますと、1923年、関東大震災の年に福島県南相馬につくられた木造の映画館をめぐる今日に至るまでの100年余りの歴史を、住民の方々の言葉を通じて見返していくという映画です。大友さんに音楽を担当してもらい、2013年に製作しました。2011年、震災当時にはなかったメロディが、ここでは少しずつ生まれてきています。ちょっとトレーラーを見てみましょう。



「ASAHIZA 人間は、どこへ行く」2013年製作／74分

このように、地元の方々に南相馬の「朝日座」という映画館がどうだったかを聞くということだけで成立した映画です。撮影のとき、地元の方々は収録が終わると「よかった、今日は原発の話がないのね」と言いました。これは非常に重要なポイントです。「プロジェクト FUKUSHIMA!」の映画を2012年に福島で上映したとき、観客から「見てもらえない」「辛い」と言われました。先ほど飯田さんのご発表で、この映画は福島の人たちをエンパワーするとか、コミュニティメディアとしての意味合いもあると言っていました。たしかにそういう面もあるかもしれませんが、僕自身としては撮影地である地元、福島で上映できない、あるいは望まれていない

という、つくり手としてはかなり痛いところを突かれる出来事でした。そこには、この映画が国家のプロパガンダなどと批判されることとは違う次元の批評性が含まれています。なので、どうしたら福島で上映が可能で、かつ外側へ広がるものが作れるのかという課題を自分としては抱えていました。

ここで、2013年の社会的なメディアの状況を共有しておきたいと思います。2012年に山形国際ドキュメンタリー映画祭のキュレーターが震災に関する映像の本数を調べたところ、すでに800本あったそうです。これは、それまでの災害のメディア史とは比較にならないほどのメディアの量産、表象の量産です。そこで何が起こるかという、まずは忘却の加速です。もっと生活感のある言葉で言うと「福島の話はもういいよ」、これに尽きます。映画館の支配人の方々も、震災の映画はお客さんが入らないから上映できないとおっしゃっていました。

表現者としては発表の場がないと困るので、こういった問題にもまた向き合わないといけませんでした。そこで「ASAHIZA」という映画は、震災前の話、震災以降の話というふうに震災によって「点」で断絶されたところをつなぐだけでなく、全国各地で町の映画館がなくなっていく、町の商店街が衰退していくという日本全土の普遍的な風景の問題を考えたい。つまり、福島で起きた南相馬の復興とは何なのか、震災前に戻ったとしても町はすでにシャッター商店街で、そこにはもっと深い構造的な問題があるんだという部分も含めて問題提起をしたかったという思いがあります。



「わたしたちがこんな目にあって、あんたたちは得をした」
2012年製作／46分

次に、そもそも僕がなぜ歴史を扱うようになったのかをお話したいと思います。これは新潟の「水と土の映像祭」¹⁾で上映する作品で、「わたたちがこんな目にあって、あんたたちは得をした」という2012年の作品です。実は「プロジェクト FUKUSHIMA!」の映像作品とパレレルに作っていたもので、2013年に発表した「ASAHIZA」の1年前の作品となります。

当時は次に福島で何が起ころのだろうかと考えていて、環境破壊における訴訟が起きるのではないかと予測し、新潟水俣病²⁾の第1訴訟を日本の環境・公害裁判の中で初めて勝訴に導いた弁護団長に会いに行き、当時どのように市民が声をあげ、国とどうすることがあったのかなどを、時代を遡り、2012年当時の福島とリンクさせたいと考えました。飯田さんのご発表の中でビデオひろばの話がありましたが、1970年代、彼らの初のビデオ作品「水俣病を告発する会—テント村ビデオ日記」(1971—1972年)では、水俣病に関して加害企業であるチッソの本社前で抗議をする人たちを撮影し、その場ですぐに再生して見せていますね。新潟での自分の作品では、当時の裁判の音声記録を弁護団長と一緒に聞き、そのフィードバックを通して現代の問題を考えていこうと試しています。この2012年から、福島を考えるとときに必要なものとして過去や歴史にアプローチしはじめました。



「核と物」2019年製作／47分 写真：椎木静寧

これは3月21日から東京藝術大学大学美術館で始まる「Welcome, Stranger, to this Place」³⁾という展覧会です。東京藝術大学大学院の学生が企画しています。僕がかつてつくった「核と物」(2019年)を留学生が上映したいと言ってきて、参加することになりました。撮影は2016年です。先ほど述べたとおり、福島だけにとどまらず外へ広がっていくものをつくることを課題としていたので、この作品では福島に関わる歴史民俗系の博物館の方だけでなく、建築学の方や、東京国立近代美術館

で戦争画のコレクションを扱っている方、原爆の記憶を継承する広島平和記念資料館の方、第五福竜丸展示館の方々と一緒に議論を行い、それを映像で記録しました。

ここで忘却に関わる話になりますが、2015～2016年くらいになると、忘却のメディア的な加速以外に大きく議論されている問題が2つありました。まず1つは、震災遺構がどんどんなくなっていくこと。住民の方々にとってはトラウマであり、震災の記憶を想起させるので見たくないということで、物質的な痕跡が消えていきました。もう1つは、オリンピックの関係で福島について語らないというか、「アンダーコントロール」なので余計なことは語るなというような、忘却を別の方向から消し去る声がどんどん高まっていったことがあります。

福島の問題は単体でスペシフィックですが、それと広島への原爆投下や第五福竜丸事件をつなげることは、地元の方からすると「それは違う」という強い思いがあります。博物館や美術館といったインスティテューションだと、地元の声もあってそういうことができません。ところが、アーティストとして僕がやりますと言えば可能になる部分があります。そういう意味で、アーティストというなにものにも所属しない者が議論の場をつくるのが、このプロジェクトの挑戦でした。大きな破局を前にしたとき、みんなで集まっていろいろ考えるという接し方は、大友さんとの「プロジェクト FUKUSHIMA!」もそうですが、今までずっと続いています。



「あかい線に分けられたクラス」2021年製作／21分

最後に、「3.11とアーティスト10年目の想像」⁴⁾という展覧会が水戸芸術館で行われています。これまでに制作した震災関連の作品を展示する予定でしたが、2020年に新型コロナウイルスの感染が拡大したとき、これまでとは別の観点から福島のことを思い出してしまったんです。それはどういう観点かというと、差別の問題です。震災が起きた後、子どもたちが避難のため各地に移動したときにいじめられるという話を散々見聞きし、実際にそ

ういう方に接してもいて、そういった問題をどうしようかと、ずっと考えていました。でも、それを表現すると2次被害になってしまうし、さらにスティグマ化してしまったりしますから非常に複雑で、保留していました。「核と物」の議論の中でも福島の方々が「心の傷をどう記憶にとどめるか」と問題提起をして議論になるのですが答えは出ず、どうしようか、というところで終わってしまっ。コロナに端を発するさまざまな問題が起こり、他者を見る視線、加害者にもなるし被害者にもなるという、地球全体が差別という問題に直面する状況になったこともあって新作をつくることにし、この展覧会で発表しています。

細かい話をするとう時間をオーバーしてしまうのでこの作品には深入りしませんが、差別の問題は、実は2011年からずっと続いていました。たとえば「プロジェクトFUKUSHIMA!」の中にもそういう問題が含まれていると思うんです。「No more Fukushima」という言葉が世で言われ、それに対して大友さんが「それはNo more FukushimaじゃなくてNo more 原発だろう」と、福島がNo moreではない、というような発言もしています。あの映画の中でもいろいろな風評被害の問題が背景にありました。「差別」というのは社会構造的なものですので、差別する側はほとんど無自覚に人を傷つけています。芸術はこの構造的な差別に先行するかたちで、他者への「まなざし」に変化を起こすことができるかもしれません。何か大きい出来事が起きたときに社会は混乱し「わかりやすい」単調で乱雑な世界観に流されやすいので、もっと「わかりにくく」複層的な世界を見せたいと思っていました。しかし、「福島差別」の問題は、正面から向き合うことができなかつた。そういう葛藤の中でこの10年間やってきましたが、今回は露悪的かもしれないけれど一歩踏み込んで、人間を「圏外」と「圏内」に分け隔て差別する／差別される物語を描いたのが、この新作です。

プロジェクトの説明だけで持ち時間が終わってしまいましたが、これで僕からは終わりにさせていただきます。

ロート／ありがとうございました。大きなコメントはせずに、詳しくは後半の議論でお話しできればと思います。が、お三方の発表の中で2点あった興味深いつながりを私なりに整理します。1つは「忘却の能動性」のようなものです。ある出来事が忘れられるだけではなく、誰が忘却をする、あるいはしたい、何のために忘却するのか、ということ逆を問いたくなりました。このように問いを変えるときにメディアがどういう役割を果たすか、共

同体がどういう役割を果たすかということについて考えさせられました。

もう1つは、何のための記憶かということについて改めて考えさせられた点です。たとえば、いじめが続いているという問題が挙げられましたが、記憶から何かの変化を導き出すことができるのだろうか、それはどのようにできるのだろうか、ということについてもっと考えたいと思います。その際に芸術・美術がどのような役割を果たせるのかということ、後半にもう一度議論できればうれしいです。

では、第2部をこれで終わりとします。ありがとうございました。

注

- 1) 「水と土の映像祭－そこからの眼・ここからの眼」は、2021年3月19日から21日にかけて新潟市にあるゆいぽーとで開催された。2009年に第1回「水と土の芸術祭」が開催され、それからおよそ10年のあいだに県内外の8名の作家がそれぞれの視点で新潟をとらえた映像作品が上映された。
- 2) 1956年に熊本県水俣市で最初に水俣病が発見されてから9年後の1965年に新潟県阿賀野川流域で発生が確認された公害。イタイタイ病、水俣病、四日市ぜんそくとともに四大公害のひとつに数えられる。昭和電工鹿瀬工場が阿賀野川に流していた排水に未処理のメチル水銀や無機水銀が含まれており、それに汚染された魚介類を河川流域の住民が長期間食べたことによって起きた。被害者が日本で初めて本格的な公害裁判を起こした(1967年～)ことでも知られる。
- 3) 2021年3月20日から4月7日に東京藝術大学大学美術館陳列館1、2階で開催されたグループ展。藤井のほか門馬美喜、スプツニ！、蔡佳蔵(台湾)ら国内外から10名が参加。主催は東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻。監修は長谷川祐子(東京藝術大学大学院教授、東京都現代美術館参事[当時])。
- 4) 2021年2月20日から5月9日まで水戸芸術館現代美術ギャラリーで開催。東日本大震災から10年が経ち、もはや過去となりつつある震災を現代や後世に語り継ごうとする作品を紹介する展覧会。藤井のほか、高嶺格、小森はるか+瀬尾夏美、Don't Follow the Windら7組のアーティストが参加した。

